
親友以上恋人未満

零桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友以上恋人未満

【Nコード】

N5298C

【作者名】

零桜

【あらすじ】

突然引越すことになった幼なじみ。なんでも分かり合ってるのに：互いを想い合っているのに：それ以上になれない。そんな経験、貴方にはありませんか？そんな経験がある人はもちろん、ないひとにも読んでほしいショート・ストーリー。

(前書き)

駄文ですが、読んでやって下さい。

「俺さ、明日引越すんだ。秋にはあきすぐに言おうって思ってたんだけど…タイミングが掴めなくて。ごめんな」

「えっ…。まあ急で驚いたけど…そっかあ、祐くん引越すんだあ。寂しくなるね。てかまた秋って呼んだ！秋桜こすもて呼んでって言うてるじゃん。もう、小学生じゃないんだから…漢字、読めるでしょ！？」

突然の祐樹の言葉に、秋桜は泣くのを堪えてそれだけ答えた。

二人は近所に住んでいる幼なじみで、なんでも話せる存在だった。なのに祐樹が、引越すことをギリギリまで言わなかったことに、秋桜は少なからずショックを受けていた。

でも、そんなことを言って祐樹を困らせたくなかった。辛いのは祐樹も一緒なはずだから…。

秋桜が表情を曇らせると祐樹は、いつもの綺麗な笑顔で秋桜に言った。

「だって、呼びやすいじゃん。秋もいい加減、俺を祐くんなんて言うの止めろよな。ガキみたいじゃん」

「そ・れ・は、お互い様あ。フフッ」

その日は、暗くなるまで二人で話していた。時間が経つのも忘れて、楽しい時間だけが流れた。

家に帰り、秋桜はお母さんに祐樹のことを話した。

「あらっ知らなかったの？今日の朝、お母さんが挨拶に来られたのよ。なんだあ、知ってるものだと思ってた」

「今日、祐くんから聞いたよ。お父さんの仕事の都合だって…。そ

れで明日、何かプレゼントをあげたいんだけど…なんかないかなあ」

お母さんは暫く考えるような仕草をして、すぐにパアツと表情を輝かせた。

「じゃあこの小瓶、試してみない？実は、昨日頂いたんだけど…なんでも、笑顔になれるんだって♪いいと思うんだけどなあ」

「そんな、子供騙しでしょ!？」

「お菓子に入れてあげたら、効果があっても無くてもいいじゃない!?物は試しよ。別に毒とかじゃないんだし」

秋桜は結局、お母さんに説得されて、ケーキを作って行くことに。

数時間後……。

「出来たあ!!!後は、この小瓶の液体をかけて…と。よし!」
「なんだかんだ言いながらも、秋桜は祐樹の大好きなチョコレートケーキを作った。そしてそれを、綺麗にラッピングして冷蔵庫に保存。」

「明日ちゃんと渡して、笑顔でバイバイ出来ますように」
そう言って、秋桜は眠りについた。

同じ頃、祐樹もベッドに入ると「明日、秋が泣きませんように」と願って、夢の中へと入っていった。

運命の日。

祐樹は朝に出ていくと聞いていたので、秋桜は早起きをした。そしてすぐに、祐樹の家に向かう。

祐樹は既に引っ越しの準備を終え、トラックに荷物が運ばれるのを

眺めていた。

「祐く〜ん。これ、昨日焼いたの。笑顔になれるように」

「おっサンキュー♪俺も、これ秋に。お前、泣き虫だからな。お守り代わり」

秋桜が袋を開けると、パワーストーンが入っていた。

その間に祐樹は、ケーキの箱を開けていた。

「うわっこれ、俺が好きなチョコレートケーキじゃん!? 流石、幼なじみ。分かってる」

「へへ〜でしょう! 祐くんも私がこういうの好きだから、買ってくれたんでしょ?」

祐樹は既に、ケーキを頬張っている。まるで子供のようだ。その姿を見て、秋桜は泣いてしまいそうになった。

「……んつまあな。ほら、秋も食えよ。意外とイケる」

祐樹がケーキを一口に切って差し出す。

「意外とは失礼だし。パクツ……うん。さっすが私」

自然と笑顔が零れる。あの小瓶は本物だったんだあと、秋桜は他人事のように思った。

「祐くそろそろ行くよ」

車から、祐樹のお母さんが呼んでる。別れの時間だ。

「んじゃ俺行くわ」

「うん」

秋桜は、また泣きそうになりうつ向く。

ポンッ

祐樹は秋桜の頭を幼子にするように撫でた。

「秋桜。俺、お前が笑ってる方が好きだ。だから、泣くなよ?」

「…………泣かないし! てか泣いてないし。祐樹も私と離れるか

ら寂しいんじゃないの!？」

秋桜は泣くのを堪えて強がりと言った。

本当に寂しいのは、秋桜の方なのに・・・。

正直な気持ちを言えなかった。親友だから。

でも、初めて祐樹に名前を呼んで貰えて嬉しかった。

それは祐樹も同じ気持ち。

「うん、寂しいよ。でも写真とか携帯あるし。俺、また戻って来るし」

「……っそっかあ。私、いっぱい写真送るから。祐樹のこと忘れな
いから!!」

「俺も! 一生、親友な!」

祐樹は言って、車に乗り込んだ。

「うん。一生・・・親友だからね!!!!」

そう言って、二人はいつまでも手を振っていた。

二人は半泣きで…それでも笑って手を振っていた。

私も、祐樹の笑顔が大好きだよ。だから、ずっと笑っててね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5298c/>

親友以上恋人未満

2010年12月2日01時00分発行